

『ひと・まち・ものづくりの経済学』

—現代産業論の新地平—

十名直喜 (名古屋学院大学)

日本には、芸や技を「型」に凝縮しシンプル化して捉えるという文化（「型」論）の伝統がある。この「型」論の視点からアプローチし、産業・地域論として提示したのが、『現代産業に生きる技—「型」と創造のダイナミズム—』（勁草書房、2008年4月）である。その検証を行いつつ、さらに創造的に深化・発展させたのが本書である。ものづくりを軸にして、まちづくり、ひとづくりへと視野を広げ、現場調査および実践をふまえて現代産業論の視点からまとめたものである。

大震災や円高が続くなか、「日本のものづくり基盤の崩壊」を危惧する声も少なくない。一方ではものづくりに手を抜くことへの警鐘が鳴らされ、他方ではものづくりにこだわる限りイノベーションは生まれないと指摘もみられる。日本のものづくりをどのように捉えるかは、日本の針路に関わる重要な課題となっている。本書は、こうした様々な見解や課題と向き合い、本質に立ち返り、より深く広い視野から捉え直すことによって、社会、技術、文化にまたがるものづくりさらには日本型システムのイノベーションを図ろうとするものである。

『ものづくり経済学』と銘打った本は、筆者の知る限り日本ではほとんど見当たらない。また、製造業を超えた広義の視点からものづくりを捉え直し、人間発達の視点と現場に根ざした研究を軸に経済学の革新を掲げる本書は、日本初にして現場発のオリジナルなものづくり経済学の書である。

3部構成からなる本書は、ものづくりを軸にまちづくり・ひとづくりの三位一体アプローチによりまとめたものである。

第1部は、「型」論の歴史的考察をふまえて「型」の定義を深めるとともに、技術やものづくりの概念拡充へと展開する。さらに、その視点からものづくりの現場を捉えたものである。

第2部は、各地域の地場産業をとり上げ、ものづくりとまちづくりがどのように連携しつつ再生・発展への地平を切り開きつつあるかを、企業・行政・市民の三位一体視点から考察したものである。

第3部は、働き学ぶ現場に焦点をあて、働く・学ぶ・研究するという3次元の営みが、資本主義の発展のなかでどのように分離・分化し、またどのように再結合し融合していくかを、実践をふまえて人間発達の経済学の視点から考察したものである。

なお、前後に配した序章と終章は、本書の企図とアプローチを理論的・大局的に位置づけ、また総括したものである。A5版、338ページ、2940円。十名直喜著、法律文化社、2012年7月出版。

『ひと・まち・ものづくりの経済学—現代産業論の新地平—』

まえがき

序章 現代産業論の新地平—ひと・まち・ものづくりの三位一体アプローチ—

第1部 ものづくりとひとづくり—技術と現場のダイナミズム—

第1章 ものづくりと技術・技能

第2章 現場重視のものづくりと経営戦略

第3章 伝統産業のハイテク化と熟練技能伝承

第2部 ものづくりとまちづくり—産業と地域の文化的創造—

第4章 産業・地域の文化的創造とブルーツーリズム

第5章 陶磁器産業と地域の文化的再生

第6章 伊万里・有田焼の産業振興とまちづくり

第7章 地方行政改革とまちづくり

第8章 瑞浪市の産業振興とまちづくり

第3部 「働・学・研」融合とひとづくり —労働と人生の文化的創造—

第9章 工場と人間発達

第10章 “働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣

第11章 「働・学・研」融合の経験知と新地平

終章 環境文化革命と人間発達

あとがき